

【原著】

小学生の家族認知に対する Family System Test を用いた探索的研究

—学級生活満足度, 学校生活意欲, 家族からのソーシャル・サポート, ストレッサーとの関連—

小泉 智巳* 河村 茂雄**

本研究は, Family System Test (FAST) を使用し, 児童の学級生活の満足度と意欲や充実感, 家族関係におけるソーシャルサポートとストレッサー, に対する家族全体の枠組みの中での人間関係の要因を探索的に検討して整理することを目的とした。FAST は, 親密さと階層性により家族全体および全体の枠組みの中での人間関係を客観的に捉えることができる。結果, 親密さと階層性によって表現される家族内の人間関係と, 児童の学級生活に対する満足度との間に関連は認められなかった。しかし, 家族の中での児童本人または父親の影響力和, 児童の学習意欲や学級の集団活動に対する意欲の高さとの間に関連が認められた。また, 家族間の親密さ, 家族の中でのメンバーの影響力和, 家族における3つのサポート源(父親, 母親, きょうだい)からのソーシャルサポートの期待との間に関連が認められた。特に, ①児童本人とサポート源となるメンバーとの親密さ, ②児童本人を含めた子ども世代の家族の中での影響力, が重要な要因であると考えられた。そして, 父子間の親密さが低いまたは家族の中での母親の影響力が小さいことと, 家族関係において疎遠であることや不安定さの認知との間に関連が認められた。

キーワード: 小学生, Family System Test, 学校生活意欲, ソーシャルサポート

【問題と目的】

2006年に公布・施行された改正教育基本法において, 第十条に「父母その他の保護者は, 子の教育について第一義的責任を有するものであって, 生活のために必要な習慣を身に付けさせるとともに, 自立心を育成し, 心身の調和のとれた発達を図るよう努めるものとする」という家庭教育についての条文が新設された。また, 文部科学省は, 親の育児不安やしつけに対する自信などに対応するための家庭教育に対する支援の充実(子育てサポーターの配置や家庭教育手帳の作成など), 学校教育における取り組み(幼稚園における「幼児教育振興プログラム」, 家庭科等で“家庭や家族の大切さ”などに関する内容を充実した学習指導要領の実施など)において家庭教育支援に対する取り組みが行われている。つまり, 現在の社会の影響を受け, 学校, 家庭, 地域のそれぞれが急速にその姿を変えつつある中, 家

庭が子どもの発達や適応に与える影響は大きいと, 教育行政においても家庭教育は重要な課題であると考えられる。

その背景として考えられることに, 少子化, 祖父母と同居する子どもの減少, 家族機能の外部委託化, 離婚率増加によるひとり親家庭の増加, などの日本の現代家族のキーワードが挙げられる。こうした家族形態の多様化の進行にともない, 家族の持つ機能の縮小が指摘されている(樋口, 2000; 柏木, 2003; 岡堂, 2000)。これらの指摘では, あらゆるモノやサービスを代金を払って消費するようになり, 普通教育, 職業訓練, 技能習得なども外部の専門機関に委譲するようになった。また, 高齢者や病人の家族介護にも限界が感じられている。このような家族固有の機能とされていたものが外部化されていく中で, 子どもの社会化と家族メンバーの精神的健康の維持を果たす家族機能である愛情機能が相対的に大きくなっていると考えられる(樋口, 2000)。つまり, 日本の現代家族のキーワードに表されるように, 取り囲む現在の社会に大きな影響を受けな

* 山形市立第十小学校

** 早稲田大学 教育・総合科学学術院

から家族形態の多様化が進行し、同時に家族機能が縮小され、家族の愛情機能の持つ意味が大きくなってきていると考えられる。こうした家族機能の変化が家族メンバーに与える影響は大きく、日常生活を共にして持続的な関係を持つ家族との相互作用は、特に子どもの発達や適応にとって今後更に重要な要因になると考えられる。そのため、子どもまたはその家族を支援・援助していくために、家族や家族をとりまく援助資源さらにその関係性について、多分野での研究と知見を基にした実践を進めていくことが今後更に必要であると考えられる。

心理学分野においても、子どもの発達や適応に関連する親の特徴や役割と背景にある家族の問題について明らかにする試みが数多く行われている。1940年にJohansonらにより母子分離不安説が提唱されてから、不登校児の親の特徴や役割についての研究は近年もなされており、それらの研究から過保護や偏愛、共生的など、結びつきが過度に強いタイプと、逆に拒否的、放任など結びつきが弱いタイプが存在することが示されている(板橋・佐野, 2004)。また、1980年代にシステム理論の観点による家族療法が日本で導入されてから、家族をお互いに複雑に影響を及ぼしあっている1つのシステムと捉えるようになり、子どもの発達や適応を家族全体の問題として考えていく研究(長谷川, 2001; 平井・依田, 2001; 井上, 1992; 亀口, 1991; 西出・夏野, 1995; 築地, 1999)が見られるようになっていく。これらの研究から、発達過程にある子どもにとって、親の特徴や役割とその背景にある家族関係と、学校での子どもの行動や適応とは深い関係にあると考えられる。極端な結びつきを示す親の特徴や役割は学校での子どもの不適応行動に大きく影響しているが、背景にはお互いに複雑に影響を及ぼしあっている1つのシステムとしての家族の存在があると考えられる。つまり、学校での子どもの行動や適応について、特定の家族メンバー個人の問題とするのではなく家族全体の問題として、問題解決に結びつけていくような支援・援助を行う必要があると考えられる。また、親の特徴や役割の要因が明らかになっており、その知見は子どもまたはその家族に対する支援・援助をしていくための重要な視点を提供するものであると考えられる。

一方、子どもまたはその家族に対する支援・援助を

していく上で、家族アセスメントの必要性が指摘されているが、日本での家族アセスメントの歴史は浅く、十分であるとは言えない(佐藤, 2001)。家族構造には、日本の文化に根ざした普遍的な面と、現在の社会の影響を受け急速に姿を変えている面があることが想像され、お互いに複雑に影響を及ぼしあっている1つのシステムとしての家族をアセスメントする難しさがあると考えられる。家族構造を捉える方法は大きく分けて2つある。1つは家族内の特定の人間関係に焦点を当てる方法であり、もう1つは家族を単位として家族全体やそのシステムを捉える方法である。また、家族アセスメントのアプローチは、主に、質問紙法、投影法、観察法に分類される。投影法に含まれるシンボル配置技法(Symbol Figure Placement Technique)のひとつに、Family System Test(以下、FASTとする)(Gehring, 1993)があげられる。築地(2005)は、FASTは親密さと階層性によりシステム全体とシステムが内包する個々の関係の両者を評価でき、検査時には情報の言語での補足や対象者が試行錯誤できるといった柔軟性に富んでおり、さらに結果を数量的に取り扱うことのできる利点を指摘している。つまり、心理学分野での家族研究の知見を踏まえると、現在の日本の多様な家族構造を、家族内の特定の人間関係のみならず1つのシステムとして包括的に捉えることが、家族研究における課題であり、また子どもまたはその家族に対する支援・援助の基盤となると考えられる。家族アセスメントの1つであるFASTは、検査以外の情報を補足しながら、家族全体および全体の枠組みの中での人間関係を客観的に捉えることが可能であり、子どもまたはその家族に対する支援・援助の基盤となる家族アセスメントを充実したものにすると考えられる。

築地(1999)は、FASTを用いて児童の家族関係と学校適応について検討している。その結果、現実場面の結果では階層性に関しては相違が見られないものの、不適応傾向の児童の家族は、適応している児童の家族より父母間と父子間の親密さが低いことを指摘している。また、小泉・河村(2013)は、児童の家族関係におけるソーシャルサポート期待とストレス認知と、学級生活への満足度について検討している。その結果、家族関係におけるストレス認知は不適応行動に至る可能性があり、家族からのソーシャルサポートの期待は学級での意欲的な行動につながる事が明らか

になった。また、児童にとって重要な援助資源である家族からのサポート環境を整えるために、児童が家族からサポートを受けた経験を増やし、家族との親密度を高める重要性を指摘している。したがって、本研究では、FAST によって親密さと階層性で表現される家族全体および全体の枠組みの中での人間関係を客観的に捉えることで、学校での子どもの行動や適応に関連する家族内の人間関係の要因を探索的に検討し整理する。具体的には、子どもの視点から、児童の学級生活の満足度と意欲や充実感、普段から家族に愛され大切にされており、もし何か問題が起こっても援助してもらえる期待の強さである社会的資源としてのソーシャルサポート、児童が日常の家族関係において経験する些細な苛立ち事としてのストレスの経験、を1つの指標として取り上げる。

以上のことから、本研究は、子どもまたはその家族を支援・援助していくための視点を求めるために、児童の学級生活の満足度と意欲や充実感、家族関係におけるソーシャルサポートとストレス、に対する家族全体の枠組みの中での人間関係の要因を明らかにすることを目的とした。

【方法】

1. 調査対象 A 県の公立小学校1校に在籍する小学生3～5年生89名(男子48名、女子41名)を対象とした。

調査対象の小学校は、A 県のB 地方にある都市郊外にあり、各学年3 学級で運営されている中規模校である。以前は国際理解教育が盛んであり、現在は学生チューター事業の実施により、近くにある大学の学生が訪れることも多い。学区には、祖父母の世代以前からこの地域に住んでいる世帯が多い地域、新興住宅地として他の地区から転入してきた世帯が多い地域があり、調査対象の児童の世帯は、三世代家族が37 世帯、核家族が52 世帯であった。

2. 測定用具 児童の学級生活への満足度については、標準化された尺度である「Q-U : QUESTIONNAIRE-UTILITES (小学生用) (河村, 1999) 中の「いごちのよいクラスにするためのアンケート (以下、学級生活満足度尺度とする)」を用いた。「承認得点」(6 項目)と「被侵害得点」(6 項目)の2つの

因子得点により、児童の学級への満足度を測定し理解している。評定は、「まったくない、まったくそう思わない、まったくいない(1 点)」から「よくある、とてもそう思う、たくさんいる(4 点)」までの4 件法である。

児童の学校生活における意欲や充実感については、「Q-U : QUESTIONNAIRE-UTILITES (小学生用) (河村, 1999) 中の「やる気のあるクラスをつくるためのアンケート (以下、学校生活意欲尺度とする)」を用いた。「友達関係」(3 項目)、「学習意欲」(3 項目)、「学級の雰囲気」(3 項目)の3 つの領域について、児童個々の意欲の高さと領域による偏りを測定し理解している。評定は、「まったくそう思わない(1 点)」から「とてもそう思う(4 点)」までの4 件法である。

小学生用ソーシャルサポート尺度は、将来何か問題が生じた場合に、周囲の人びとからどの程度の援助を期待できるかを調べることを目的とした尺度(久田・千田・箕口, 1989)を、嶋田(1993)が小学生向けに修正したものの短縮版を用いた。本来は5 つのサポート源(父親、母親、兄弟姉妹、学校の先生、友だち)それぞれについてのソーシャルサポートの期待の回答を求めるものであるが、本研究においては5 項目に対し、3 つのサポート源(父親、母親、きょうだい)について回答を求めた。評定は、「ぜったいにちがう(1 点)」から「きっとそうだ(4 点)」までの4 件法である。

児童が日常の家庭生活の中でストレスであること認知している出来事については、小学生用家族関係ストレス尺度(小泉・河村, 2013)を用いた。「家族からの期待・強制」(8 項目)と「家族関係の希薄・不安定」(5 項目)の2 つの下位尺度からなる。評定は嫌悪度について「ぜんぜんいやでなかった(1 点)」から「ひじょうにいやであった(4 点)」までの4 件法である。

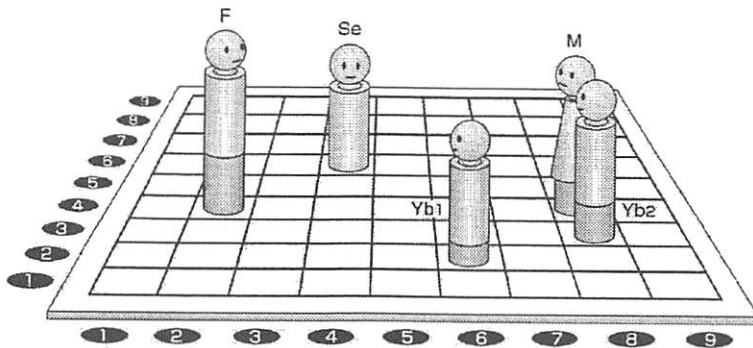
家族の親密さと家族における世代間境界(階層性)の組み合わせによる児童の家族関係認知の把握については、Family System Test (FAST) (Gehring, 1993)を用いた。テスト盤1 枚と無彩色木製の人形とブロックで構成されている。目と口が描かれた、男の人形6 体と女の人形6 体、合計12 体の家族を表す人形と、人形の高さを変えるための低、中、高の3 種類のブロックが各6 個ずつ用意されている。人形の高さはいずれも

8cmであり、低いブロックが1.5cm、中のブロックが3.0cm、高いブロックが4.5cmであった。テスト盤は、チェスボードの碁盤の目のように区切られている(Figure 1)。FASTは日本語版マニュアル(八田訳編, 1997)に基づき行った。なお、テスト盤のどの位置に人形を置き、その人形の高さはいくらであったかを記録するため、テスト盤と同じような9行×9列のマス目と、家族構成や児童の自発的な会話を書き込む記録用紙をマニュアルに基づいて作成した。

3. 調査時期と手続き 2004年1月下旬、調査対象の児童に、学級生活満足度尺度(河村, 1999)、学校生活意欲尺度(河村, 1999)、小学生用ソーシャルサポート尺度(嶋田・岡安・坂野, 1993)、小学生用家族関係ストレス尺度(小泉・河村, 2013)への回答を依頼した。調査用紙には、研究の趣旨、本テストが学校の成績に関係がないこと、担任および友だちに回答内容が公開されないことがないことを明示した。さらに児童の回答用紙は、用意した封筒に入れその場で密閉し、児童に余計な不安がかからないように配慮した。

また、2004年2月、調査対象の児童にFASTを用いた個別面接を行った。児童との個別面接を行うにあたって、研究の趣旨を学校側から保護者に通知することで了解を得た。ひとり親といった欠損家庭など面接過程で配慮の必要と思われる児童については、事前に担

任からの報告を受け、配慮を行った。面接実施者は、本研究者と心理学を専攻している大学院生を含めた3名である。面接実施者は事前に大学生を対象としてFASTの実習を行った。面接は静かな教室で面接実施者がそれぞれ個別に実施した。対象児童と面接実施者はテスト盤を置いた机を間にして対面する形で着席し、反応の記録も面接と同時に面接実施者が行った。まず、FASTは対象児童の家族の様子を調べる検査であることを説明した。具体的には、「今からこの人形とブロックを使ってあなたの家族がどのような家族であるのかを表してもらいます」、「このテストには、あっているとか、間違っているということはないので自由に並べてください」と教示した。そして、「あなたの家族にはどんな人がいますか」とたずね、家族メンバーと対象児童との関係(父・母・兄・妹など)を聞き取った。次に、FASTにおいて家族関係を表現する方法について、検査用具を用い、面接実施者の家族の配置図による具体例を用いながら次の点を教示した(Figure 2)。



記号はFが父、Mが母、Seが対象児童、Yb1が上の兄、Yb2が下の兄を表す。Fの下に置かれているブロックが「高」、MとYb2の下ブロックが「中」、Yb1の下ブロックが「低」である。

Figure 1 FASTの配置図(築地, 1999)

面接実施者と の関係	父 (F)	母 (M)	面接 実施者 (Se)	きょうだい (Yb2)		
配置順	4	3	1	2		
人形の 高さ	4	2	1	0		

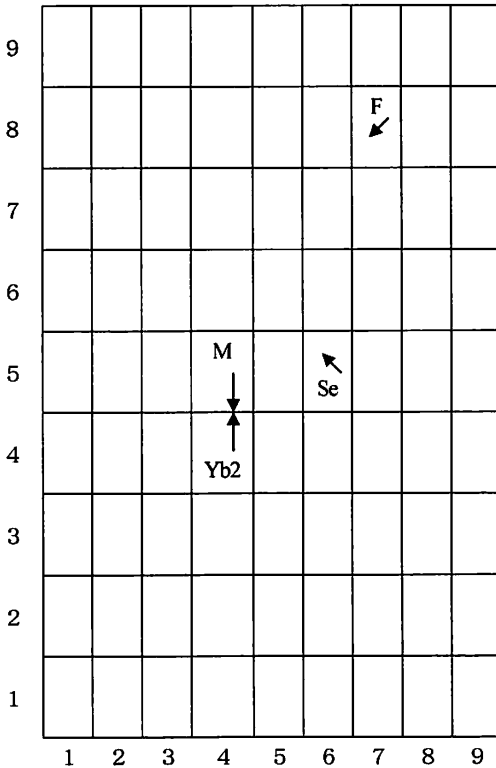


Figure 2 面接実施者の家族の配置図

(1) 親密さ： 家族メンバー間の親密さは、人形の距離によって表現され、二者間の親密さは人形が隣接するときもっとも高く、人形間の距離が大きければ大きいほど親密さが低い。例示によって、隣接したマス目にいる母の人形ときょうだいの人形を指し、「母ときょうだいはとても仲がよいので隣り合わせのマスに置きました」と説明した。また少し離れた場所に置いた父の人形を指し、「父は仕事が忙しく会う機会が少ないのもありますが、あまり仲がよくないので離れたマスに置きました」と説明した。

(2) 階層性： 家族メンバーの階層性は、ブロックを用いて人形の高さに差をつけることによって表現され、人形の高さが高いほどそのメンバーが家族内で大きな影響力をもち、二者間の高さの差があるほど両者の影響力にも差がある。例示によって、きょうだいの人形の下にはブロックを置かず、自分の人形の下に一番低いブロックを置いた。「私ときょうだいにはあまり力の差はありません。しかし、私はきょうだいよりも少しだけ大きな力を持っているので、私の人形の下だけに一番低いブロックを置きました」と説明した。また、父の人形の下に一番高いブロックと一番低いブロックを重ねて置き、「父は家族の中でまとめ役であり、父の意見が通りやすいです。影響力が大きいのでブロックを重ねて置きました」と説明した。

対象児童が検査の要領を理解したかどうか確かめてから、対象児童の現在の家族関係を表現するように求めた。具体的には、「あなたの家族はいまどのような家族なのか、人形を使って表してください。まず、人形をテスト盤の上に置いてください」とはじめに家族メンバーの位置を決めるよう求め、続いて高さの変化を加えるよう教示した。人形の配置が終了した後、「家族の人形の位置や、ブロックの高さなど変えたいところはないですか。変えたいところがあれば自由に変えてもいいですよ」と教示した。その後質問によって、配置された人形が誰を表しているのかを尋ねた。人形を配置する際に対象児童が発した自発的発話も含めて記録用紙にすべて記録した。実際にはいないメンバーがテスト盤上に配置されたり、実際にはいるのに配置されてない家族メンバーがいる場合には、面接実施者からたずねて確かめた。

【結果】

FAST の日本語版マニュアル (八田訳編, 1997) によると、家族構造の把握の方法として Gehring (1993) は次の2つの方法を提案している。一つは、「家族構造タイプ」と称され、家族メンバー全員をひとつのまとまりとして捉え、その家族レベルでの親密さと階層性を評価する。求められた家族レベルでの親密さと階層性の2次元を組み合わせたものに基づき、パターンを、調和型、中間型、非調和型、の3群に分類する。もう一つは、「計量的分析」と称され、二者間の親密さを人

形間の距離で、家族の中でのメンバーの影響力を人形の高さで評価する。

本研究では、学校での子どもの行動や適応に関連する家族内の人間関係の要因を探索的に検討し整理することを目的としているため、「計量的分析」を用いて検討を進めた。また、本研究では、比較的少ない対象児童において傾向を察知するという目的で、10%水準も有意な傾向として確認した。

1. FAST の計量的分析の方法

(1) 距離：親密さ (cohesion) とはメンバー間の結びつき、あるいは愛情、または親しさと定義される (Gehring, 1993)。家族メンバーの親密さの指標として、FAST においては人形間の距離を算出する。人形的位置を数値で示すために、FAST の日本語版マニュアル (八田訳編, 1997) と同様の方法を用いた。例えば、隣り合う人形間の距離は1、テスト盤上の対角線上の最も離して置かれたマス目の場合は最大距離の11.3とされる。本研究では父、母、本人、きょうだいに限定し、父子間、母子間、父母間、本人ときょうだい間 (数人きょうだいがいる場合は平均)、の距離を指標として用いた。

(2) 高さ：階層性 (hierarchy) とはメンバーの権力、決定力であったり、他のメンバーに対する影響力であると定義される。また、階層性という概念は、家族内で役割構造やルール変化の検討に用いられてきた (Gehring, 1993)。家族の中の影響力を階層性としてとらえ、人形の高さを数値で示すために、FAST の日本語版マニュアル (八田訳編, 1997) と同様の方法を用いた。人形の台として用いたブロックについて、高

さがもっとも低いブロックの得点を1、中程度のブロックの得点を2、もっとも高いブロックの得点を3とした。父親、母親、本人、きょうだい (数人きょうだいがいる場合は平均)、の高さを指標として用いた。

二者間の親密さの指標として人形間の距離、家族の中でのメンバーの影響力の指標として人形の高さ、を前述の方法で求めた。距離・高さについての平均値および標準偏差を Table 1 に記した。

2. FAST の計量的分析の結果

(1) FAST の親密さ、階層性と学級生活満足度尺度、学校生活意欲尺度との関連

FAST の二者間の距離 (父子間、母子間、父母間、本人ときょうだい間) と、人形の高さ (父、母、本人、きょうだい) それぞれについて平均値を用いて、H 群 (距離；二者間の親密さが低い群、高さ；家族の中でのメンバーの影響力が大きい群)、L 群 (距離；二者間の親密さが高い群、高さ；家族の中でのメンバーの影響力が小さい群) とした。

FAST の距離と高さを分類した2群の、学級生活満足度尺度の下位尺度と、学校生活意欲尺度の下位尺度それぞれの得点と *t* 検定を行った (Table 2,3)。その結果、距離と高さに対して学級生活満足度尺度の「承認得点」と「被侵害得点」に有意な差は認められなかった。しかし、父の人形の高さに対して「学習意欲」に有意な傾向 ($t=1.78, p<.10$) が認められた。また、本人の人形の高さに対して、「学習意欲」に有意な差 ($t=3.66, p<.001$)、「学級の雰囲気」に有意な傾向 ($t=1.68, p<.10$) が認められた。したがって、家族間の親密さ、家族の中での影響力と児童の学級生活に対す

Table 1 FAST の距離と高さの平均値と標準偏差

距離	F-Se (父子間)	2.70 (1.35)
	M-Se (母子間)	1.97 (.98)
	F-M (父母間)	2.77 (1.58)
	Se-Yb (本人ときょうだい間)	1.80 (.68)
高さ	F (父)	3.22 (1.54)
	M (母)	2.56 (1.15)
	Se (本人)	1.23 (.88)
	Yb (きょうだい)	1.38 (.77)

() 内は標準偏差

Table 2 F の H, L 群ごとの学級生活満足度尺度, 学校生活意欲尺度の平均値と標準偏差および t 検定の結果

	H 群	L 群	t 値	比較
学級生活満足度				
承認	18.72(15.73)	17.63(11.37)	1.22 <i>n.s.</i>	
被侵害	12.57(12.05)	13.22(21.79)	-.58 <i>n.s.</i>	
学校生活意欲				
友達関係	10.09(2.75)	9.54(3.68)	1.17 <i>n.s.</i>	
学習意欲	10.00(2.18)	9.21(3.55)	1.78 †	H>L
学級の雰囲気	10.39(1.61)	9.68(3.50)	1.66 <i>n.s.</i>	

() 内は標準偏差 † $p<.10$.

Table 3 Se の H, L 群ごとの学級生活満足度尺度, 学校生活意欲尺度の平均値と標準偏差および t 検定の結果

	H 群	L 群	t 値	比較
学級生活満足度				
承認	18.30(16.94)	17.59(10.47)	.84 <i>n.s.</i>	
被侵害	13.37(22.24)	12.83(17.16)	.51 <i>n.s.</i>	
学校生活意欲				
友達関係	9.84(2.85)	9.59(3.56)	.57 <i>n.s.</i>	
学習意欲	10.42(2.25)	8.98(2.98)	3.66***	H>L
学級の雰囲気	10.34(1.51)	9.67(3.48)	1.68 †	H>L

() 内は標準偏差 *** $p<.001$., † $p<.10$.

る満足度との関連は、本研究においては認められなかった。しかし、児童が、家族の中で父親の影響が大きいかまたは家族の中で本人の影響が大きいかと認知していると、児童の学習意欲が高いことが示唆された。そして、児童が家族の中で本人の影響が大きいかと認知していると、児童の学級での集団活動に対する意欲が高いことが示唆された。

(2) FAST の親密さ、階層性と家族からのソーシャルサポート、ストレスラーとの関連

FAST の二者間の距離（父子間、母子間、父母間、本人ときょうだい間）と、人形の高さ（父、母、本人、きょうだい）を分類した 2 群の、小学生用ソーシャルサポート尺度の 3 つのサポート源と、小学生用家族関係ストレスラー尺度の下位尺度それぞれの得点と t 検定を行った (Table 4~10)。その結果、父子間の距離に対して「家族関係の希薄・不安定」に有意な傾向 ($t=1.86, p<.10$) が認められた。母子間の距離に対して「母親サポート」に有意な差 ($t=-3.99, p<.001$) が

認められた。父母間の距離に対して「母親サポート」に有意な差 ($t=-2.39, p<.05$) が認められた。本人ときょうだい間の距離に対して「きょうだいサポート」に有意な傾向 ($t=-1.97, p<.10$) が認められた。母の人形の高さに対して「家族関係の希薄・不安定」に有意な傾向 ($t=-1.73, p<.10$) が認められた。本人の人形の高さに対して、「父親サポート」 ($t=2.71, p<.01$) と「きょうだいサポート」 ($t=3.49, p<.001$) に有意な差が認められた。きょうだいの人形の高さに対して「きょうだいサポート」に有意な差 ($t=2.08, p<.05$) が認められた。したがって、児童が家族の中で本人の影響が大きいかと認知していると、父親からのソーシャルサポートの期待が高いことが示唆された。また、児童が、母子間の親密さが高いまたは父母間の親密さが高いと認知していると、母親からのソーシャルサポートの期待が高いことが示唆された。そして、児童が、本人ときょうだい間の親密さが高いまたは家族の中で本人の影響が大きいかまたは家族の中できよ

Table 4 F-Sc の H, L 群ごとの小学生用ソーシャルサポート尺度, 小学生用家族関係ストレス尺度の平均値と標準偏差および *t* 検定の結果

	H 群	L 群	<i>t</i> 値	比較
ソーシャルサポート				
父親サポート	16.48(14.66)	15.20(22.95)	1.28 n.s.	
母親サポート	17.27(14.26)	16.90(16.96)	.39 n.s.	
きょうだいサポート	13.16(25.93)	12.35(23.26)	.68 n.s.	
家族関係ストレス				
期待・強制	16.11(33.94)	15.50(30.90)	.42 n.s.	
希薄・不安定	10.34(7.43)	9.08(6.79)	1.86 †	H>L

() 内は標準偏差 † $p < .10$.Table 5 M-Sc の H, L 群ごとの小学生用ソーシャルサポート尺度, 小学生用家族関係ストレス尺度の平均値と標準偏差および *t* 検定の結果

	H 群	L 群	<i>t</i> 値	比較
ソーシャルサポート				
父親サポート	15.09(18.45)	16.48(20.75)	-1.37 n.s.	
母親サポート	15.46(20.48)	18.77(5.20)	-3.99***	L>H
きょうだいサポート	12.11(22.64)	13.78(25.33)	-1.45 n.s.	
家族関係ストレス				
期待・強制	16.47(32.95)	15.85(38.57)	.41 n.s.	
希薄・不安定	9.84(7.86)	9.25(6.89)	.84 n.s.	

() 内は標準偏差 *** $p < .001$.Table 6 F-M の H, L 群ごとの小学生用ソーシャルサポート尺度, 小学生用家族関係ストレス尺度の平均値と標準偏差および *t* 検定の結果

	H 群	L 群	<i>t</i> 値	比較
ソーシャルサポート				
父親サポート	14.87(24.17)	16.20(15.93)	-1.30 n.s.	
母親サポート	15.81(22.15)	17.95(9.18)	-2.39*	L>H
きょうだいサポート	12.32(24.75)	13.07(25.10)	-.62 n.s.	
家族関係ストレス				
期待・強制	15.68(39.81)	16.13(26.98)	-.31 n.s.	
希薄・不安定	10.16(8.47)	9.20(6.87)	1.33 n.s.	

() 内は標準偏差 * $p < .05$.Table 7 Se-Yb の H, L 群ごとの小学生用ソーシャルサポート尺度, 小学生用家族関係ストレス尺度の平均値と標準偏差および *t* 検定の結果

	H 群	L 群	<i>t</i> 値	比較
ソーシャルサポート				
父親サポート	14.89(17.88)	16.36(21.60)	-1.42 n.s.	
母親サポート	16.27(19.25)	17.25(14.51)	-1.04 n.s.	
きょうだいサポート	11.71(22.83)	13.89(23.37)	-1.97 †	L>H
家族関係ストレス				
期待・強制	15.02(35.91)	17.27(31.64)	-1.59 n.s.	
希薄・不安定	9.51(7.78)	9.65(6.87)	-.21 n.s.	

() 内は標準偏差 † $p < .10$.

Table 8 M の H, L 群ごとの小学生用ソーシャルサポート尺度, 小学生用家族関係ストレス尺度の平均値と標準偏差および *t* 検定の結果

	H 群	L 群	<i>t</i> 値	比較
ソーシャルサポート				
父親サポート	15.37(19.72)	15.97(19.48)	-.59 <i>n.s.</i>	
母親サポート	16.66(17.44)	17.15(14.74)	-.54 <i>n.s.</i>	
きょうだいサポート	12.42(23.78)	13.28(26.09)	-.74 <i>n.s.</i>	
家族関係ストレス				
期待・強制	16.37(33.65)	16.56(35.48)	-.13 <i>n.s.</i>	
希薄・不安定	8.94(7.08)	10.09(7.44)	-1.73 †	L > H

() 内は標準偏差 †*p* < .10.

Table 9 Sc の H, L 群ごとの小学生用ソーシャルサポート尺度, 小学生用家族関係ストレス尺度の平均値と標準偏差および *t* 検定の結果

	H 群	L 群	<i>t</i> 値	比較
ソーシャルサポート				
父親サポート	17.70(10.04)	14.91(21.06)	2.71**	H > L
母親サポート	17.60(10.08)	16.59(18.49)	1.04 <i>n.s.</i>	
きょうだいサポート	15.50(20.87)	11.52(21.60)	3.49***	H > L
家族関係ストレス				
期待・強制	15.91(27.62)	16.58(37.44)	-.45 <i>n.s.</i>	
希薄・不安定	9.72(12.39)	9.37(5.03)	.50 <i>n.s.</i>	

() 内は標準偏差 ****p* < .001., ***p* < .01.

Table 10 Yb の H, L 群ごとの小学生用ソーシャルサポート尺度, 小学生用家族関係ストレス尺度の平均値と標準偏差および *t* 検定の結果

	H 群	L 群	<i>t</i> 値	比較
ソーシャルサポート				
父親サポート	15.68(20.76)	15.48(19.20)	.19 <i>n.s.</i>	
母親サポート	16.33(18.43)	17.15(14.62)	-.88 <i>n.s.</i>	
きょうだいサポート	13.87(21.59)	11.56(25.53)	2.08*	H > L
家族関係ストレス				
期待・強制	15.77(42.77)	16.97(24.87)	-.85 <i>n.s.</i>	
希薄・不安定	9.34(7.23)	9.63(7.55)	-.44 <i>n.s.</i>	

() 内は標準偏差 **p* < .05.

うだいの影響力が大きいと認知していると、きょうだ
いからのソーシャルサポートの期待が高いことが示唆
された。最後に、児童が、父子間の親密さが低いまた
は家族の中で母親の影響力が小さいと認知していると、
家族関係において疎遠であることや不安定さを高く認
知していることが示唆された。

【考 察】

結果から、親密さと階層性によって表現される家族
内の人間関係と、児童の学級生活に対する満足度との
間に関連は認められなかった。しかし、家族の中での
メンバーの影響力と、児童の学校生活における意欲や

充実感との間に関連が認められた。また、家族間の親密さ、家族の中でのメンバーの影響力と、家族における3つのサポート源（父親、母親、きょうだい）からのソーシャルサポートの期待との間に関連が認められた。そして、家族間の親密さ、家族の中でのメンバーの影響力と、家族関係において疎遠であることや不安定さの認知との間に関連が認められた。

子どもまたはその家族を支援・援助していく視点から、①児童の学級生活の満足度と意欲や充実感に対する家族全体の枠組みの中での人間関係の要因、②家族関係におけるソーシャルサポート、ストレスナーに対する家族全体の枠組みの中での人間関係の要因、について整理し考察した。

1. 親密さと階層性によって表現される家族内の関係と児童の学級への満足度、学校生活における意欲・充実感との関連

1980年代にシステム理論の観点による家族療法が日本で導入されてから、家族をお互いに複雑に影響を及ぼしあっている1つのシステムと捉えるようになり、学校での子どもの行動や適応について、家族全体の問題として考えていく研究（長谷川、2001；平井・依田、2001；井上、1992；亀口、1991；西出・夏野、1995；築地、1999）が見られるようになってきている。本研究と同様にFASTを用いた築地（1999）の研究では、児童の学校適応について、現実場面の結果では階層性に関しては相違が見られないものの、不適応傾向の児童の家族は、適応している児童の家族より親密さが低いことを指摘している。しかし、本研究においては、親密さと階層性によって表現される家族内の人間関係と、児童の学級生活に対する満足度との間に関連は認められなかった。平井・依田（2001）は、家族の凝集性により、家族メンバーとの信頼感や安心感が生まれ、子ども自身も自分に対する自信を持つようになる。そして、家族メンバーとの関係を維持する「積極的な関係維持行動」スキルの般化によって、学校での仲間関係も良好なものに変化するのではないかと述べている。したがって、本研究において親密さと階層性によって表現される家族内の人間関係と学級生活に対する満足度との関連が認められなかった理由として、小学生において、特定の家族内の人間関係のあり方自体のみが学校適応に直接影響するのではなく、1つのシステムとしての家族がお互いに複雑に影響を及ぼしあう中で、

家族の愛情機能が子どもの心理社会的発達を促進し、学校での子どもの適応の媒介変数となっている可能性が考えられる。

1つ注目すべき点として、家族の中でのメンバーの影響力と、児童の学校生活における意欲や充実感との間に関連が認められたことが挙げられる。具体的には、児童が、家族の中で本人の影響力が大きいまたは家族の中で父親の影響力が大きいと認知していると、児童の学習意欲が高いことが示唆された。また、児童が家族の中で本人の影響力が大きいと認知していると、児童の学級での集団活動に対する意欲が高いことが示唆された。河村・田上（1997）は、「友達関係」、「学習意欲」、「学級の雰囲気」の3つの領域によって測定される学校生活における意欲や充実感は、児童の学校への適応の指標になることを確認している。また、新藤・相模・田中（2002）は、自己の力が強いと感じられるのは、子どもが関心を向けられていて大切にされていると感じていることの裏返しであると述べている。さらに、酒井・菅原・真榮城・菅原・北村（2002）は、子どもが親に抱く信頼感の高さが子どもの学校適応を促す変数であり、親との信頼関係の形成が子どもの自尊心を高め学校適応を促すことが明らかになっている。つまり、児童が家族の中で関心をむけられ大切にされていると感じていることで、家族への信頼感と児童自身の自尊感情が高まり、家族の中での本人の影響力の大きさとして表される。また、その児童自身の自尊感情の高まりが、学校での学習や学級の集団活動における意欲や充実感にポジティブな影響を及ぼすという形で、学級生活への満足度につながっていることが推測される。

立木（1994）は、中学生の課業緊張型ストレス（教師、授業、成績、宿題など）は家族内の親優位のリーダーシップを確立することによって緩和する傾向があることを明らかにしている。本研究においても同様に、児童が家族の中で父親の影響力が大きいと認知していると、児童の学習意欲が高いことが確認された。

2. 親密さと階層性によって表現される家族内の関係と家族からのソーシャルサポートとの関連

家族間の親密さ、家族の中でのメンバーの影響力と、家族における3つのサポート源（父親、母親、きょうだい）からのソーシャルサポートの期待との間に関連が認められた。家族からのソーシャルサポートの期待

については、サポート源の違いにより関連する家族内の関係に違いが認められた。

(1) サポート源となるメンバーとの親密さ

親密さ (cohesion) とはメンバー間の結びつき、あるいは愛情、または親しさと定義される (Gehring, 1993)。児童が、母子間の親密さが高いまたは父母間の親密さが高いと認知していると、母親からのソーシャルサポートの期待が高いことが示唆された。また、児童が本人ときょうだい間の親密さが高いと認知していると、きょうだいからのソーシャルサポートの期待が高いことが示唆された。つまり、母親ときょうだいからのソーシャルサポートの期待に関しては、児童とサポート源となるメンバーとの親密さ (結びつき・愛情・親しさ) が重要な要因であると考えられる。

岡安・嶋田・坂野 (1993) は、知覚されたソーシャルサポートの水準が高いことは、過去に他者からサポートを受けた経験が多いことや他者との親密度が高いこと、すなわちサポート入手可能性に対する期待が高いことを意味していると述べている。また、日本の家族の特徴の1つとして、母子密着傾向が挙げられる。池田 (1996) は、FAST を用いた日本の大学生の家族についての研究で、母子間の距離が父子間や父母間の距離より小さいという結果を得ている。そして、大下・亀口 (1999) は、母親との関係によって、父親との関係やその他の関係が位置付けられることを考察している。本研究においても、子ども世代である本人ときょうだい間の距離を除くと、母子間の距離が父子間と父母間の距離より小さく、母親との関係が家族内の人間関係の基盤になっていることも推測される。また、小学生において、親密さ (結びつき・愛情・親しさ) を高く感じる母親との関係は、家族内の人間関係の基盤になるとともに、母親からサポートを受ける経験を増やし、問題が生じた場合に母親からのサポート入手可能性に対する期待を高めると考えられる。したがって、家族内の人間関係の基盤になる母子関係においては、渡邊・平石 (2007) の指摘する通り、母親は子どもの心理社会的発達を促進する養育態度で子どもと関わるだけでなく、子どもとの良好な関係性を構築・維持するといった視点で関わることも重要であると考えられる。

もう1つ重要な視点として、父母間の親密さと母親からのソーシャルサポートの期待との間に関連が認め

られたことが挙げられる。国谷 (1988) は、夫婦関係の調和は、健康な親子関係形成の調整のために必要不可欠であると述べている。前述した通り、母子密着傾向が指摘される日本の家族において、小学生における親密さを感じる母親との関係は、家族内の人間関係の基盤になるとともに、母親からのソーシャルサポートの期待につながると考えられる。そして、こうして母親からのソーシャルサポートの期待につながる背景には、夫婦の絆が家族機能の中核となって母子関係も含めた健康な親子関係形成の調整に働いており、児童が父母間の親密さ (結びつき・愛情・親しさ) を高く認知することで表されることが推測される。

(2) 子ども世代の家族の中での影響力

階層性 (hierarchy) とはメンバーの権力、決定力であったり、他のメンバーに対する影響力であると定義される (Gehring, 1993)。児童が家族の中で本人の影響力が大きいと認知していると、父親からのソーシャルサポートの期待そしてきょうだいからのソーシャルサポートの期待が高いことが示唆された。また、児童が家族の中できょうだいの影響力が大きいと認知していると、きょうだいからのソーシャルサポートの期待が高いことが示唆された。つまり、父親ときょうだいからのソーシャルサポートの期待に関しては、児童を含めた子ども世代の階層性 (権力・決定力・影響力) が重要な要因であると考えられる。

前述した FAST の親密さ、階層性と学校生活意欲尺度との関連において、児童が家族の中で関心をむけられ大切にされていると感じていることで、家族への信頼感と児童自身の自尊感情が高まり、家族の中での本人の影響力の大きさとして表されることが推察された。そのような家族内の人間関係にいるきょうだいは、同様に関心を向けられていて大切にされていると感じていることが想像され、きょうだいの影響力の大きさにつながると推測される。したがって、家族の中で関心をむけられ大切にされていると感じていることによる子ども世代の自尊感情が高まりは、子ども世代の階層性 (権力・決定力・影響力) として表される。また、小学生において、そのような家族内の人間関係はサポートを受ける経験を増やすとともに、家族の中で子ども世代の影響力の大きさは自らがサポートを求める志向や行動を促進し、問題が生じた場合に父親ときょうだいからのサポート入手可能性に対する期待を高め

ると考えられる。

亀口 (2003) は、小学生の家族イメージの特徴として、家族内のパワーの順位を父親、母親、自己の順に認知していることを明らかにしている。本研究においても、人形の高さは、父親、母親、きょうだい、本人の順で高かった。また、本研究と同様に FAST を用いた中見・桂田 (2007) の研究では、大学生の精神的健康度について、親密さが高いと階層性の世代間境界に関係なく精神的健康度が高く、親密さが低くなると、日本の家族では潜在的であると考えられる世代間境界が明確であることが精神的健康につながることを指摘している。つまり、家族の中で関心をむけられ大切にされていると感じていることが、児童自身の自尊感情の高まりとして児童本人の階層性 (権力・決定力・影響力) の大きさに影響していることが推測され、小学生において、家族間の親密さの高さが階層性においても重要な視点であると考えられる。さらに、親世代の階層性 (権力・決定力・影響力) と子ども世代の階層性 (権力・決定力・影響力) との間に世代間境界があくまで明確であった上で、家族の中で児童本人の影響力が発揮できると感じられることが、父親ときょうだいのソーシャルサポートの期待につながっているのかもしれない。

以上のことから、家族からのソーシャルサポートの期待について、①サポート源となるメンバーとの親密さと、②子ども世代の家族の中での影響力、が重要な要因であると考えられる。小泉・河村 (2013) は、家族からのソーシャルサポートの期待は学級での意欲的な行動につながるため、家族は児童にとって重要な援助資源であり、家族からのサポート環境を整えることが、学校場面での適応や発達には必要であると指摘している。本研究では、家族の二者間の親密さと家族の中でのメンバーの影響力によって表現される家族内の人間関係を指標としており、お互いに複雑に影響を及ぼしあっている1つのシステムとしての家族を十分に検討しているとは言い難い。しかし、家族からのソーシャルサポートの期待に関連する家族間の親密さと家族の中でのメンバーの影響力について、サポート源ごとの要因が明らかになったため、児童の学校場面での適応や発達に結びつけていく援助の視点を提供するものと考えられる。

3. 親密さと階層性によって表現される家族内の関係

と家族からのストレスサーとの関連

家族間の親密さ、家族の中でのメンバーの影響力と、家族関係において疎遠であることや不安定さの認知との間に関連が認められた。具体的には、児童が、父子間の親密さが低いまたは家族の中で母親の影響力が小さいと認知していると、家族関係において疎遠であることや不安定さを高く認知していることが示唆された。

川中 (1996) は不登校の家族に関する研究を概観している。1940年に Johanson らにより母子分離不安説が提唱されてからは、不登校の一群について主として母子関係の中に現象する不安の反応の一表現としてとらえている。そうした母親たちは不安が高く、神経症的な傾向を有していると考えられる。また、1960年代後半頃から、家庭内で父親の不在や支配性の弱さが認められ、父親が家庭内で積極的役割をとっていないという父親の問題が多く指摘されるようになった (牧田・小此木・鈴木, 1967; 山崎, 1972)。つまり、初期の不登校研究において中心となる家族の要因として、母子分離不安に代表されるような母子関係が指摘されており、それを助長するような形で父親の不在や支配性の弱さが指摘されている。本研究の結果では親の役割や特徴を考察することに関して慎重でなければならないが、母親と父親ともに子どもに対して適切な役割を果たすことができていないことが、小学生において、父子間の親密さの低さ、家族の中での母親の影響力の小ささとして表されており、家族関係において疎遠であることや不安定さの認知につながっているとも推測することができる。

不登校に関して母子関係が指摘されることについて、森岡(1980)は、「その背景には、母親自身の家庭内での地位確立が不十分で、何らかの葛藤を生じており、その中で子どもに対する養育態度の自信の欠如が顕著である」と述べ、過保護・過干渉になる背景に着目する必要性を示唆している。つまり、親の特徴や役割にばかり原因を帰属するのではなく、その背景にあるお互いに複雑に影響を及ぼしあっている1つのシステムとしての家族の存在に着目する必要があるといえる。重要な視点として、子どもまたはその家族を支援・援助にあたる学校などの援助者は、様々な家族があることを十分に理解した上で、特定の家族メンバー個人の問題を捉えるのではなく、そうならざるを得ない家族全体の問題として詳細なアセスメントを行い、家族の

抱える問題を受容・共感的に受けとめ、問題解決に結びつけていくような支援・援助を行う必要があると考えられる。

【今後の課題】

本研究では、児童の学級生活の満足度と意欲や充実感、家族関係におけるソーシャルサポートとストレス、に対する家族全体の枠組みの中での人間関係の要因を整理し考察した。特に、家族からのソーシャルサポートの期待に関連する家族間の親密さと家族の中でのメンバーの影響力について、サポート源ごとの要因が明らかになったが、その背景にあるお互いに複雑に影響を及ぼしあっている1つのシステムとしての家族をより詳細に検討することが求められるだろう。子どもまたはその家族を支援していく上で、家族アセスメントの知見を積み重ねていくとともに、本研究で得られた知見を基に臨床像を検討することが必要である。今後の課題にしたい。

【引用文献】

- Gehring, T. M 1993 Familien System Test Manual. German: Beltz Test Gesellschaft. (八田武志訳 1997 FAST マニュアル ユニオンプレス)
- 長谷川啓三 2001 臨床家として家族療法を学ぶ 臨床心理学, 1, 423-436.
- 樋口良成 2000 家族機能の変化 増子勝義(編) 新世紀家族さがしーおもしろ家族論 学文社 20-29.
- 平井誠子・依田 明 2001 家族の凝集性と家族コミュニケーションー子どもの社会的スキルに対する影響ー 昭和女子大学生生活心理研究所紀要, 4, 1-23.
- 久田 満・千田茂博・箕口雅博 1989 学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み(1) 日本社会心理学会第30回大会発表論文集, 143-144.
- 池田和夫 1996 日本人大学生における家族構造認知の特徴ーFamily System Testによる国際比較ー 高知大学人文学部人文学科・人文学研究, 4, 11-20.
- 井上美紗子 1992 分離不安型登校拒否の再考 家族心理学研究, 6, 37-48.
- 板橋登子・佐野秀樹 2004 不登校児の母親についての研究の現状と課題 カウンセリング研究, 37, 74-84.
- 亀口憲治 1991 「家族境界膜」の概念とその臨床的応用 家族療法, 8, 20-29.
- 亀口憲治 2003 小学生が描く家族 家族のイメージ 河出書房新社 72-77.
- 柏木恵子 2003 家族とその起源・進化・発達 家族心理学ー社会変動・発達・ジェンダーの視点 東京大学出版会 3-56.
- 河村茂雄 1999 楽しい学校生活を送るためのアンケート「Q-U」実施・解釈ハンドブック(小学校編) 図書文化社
- 河村茂雄・田上不二夫 1997 いじめ被害・学級不適応児童発見尺度の作成 カウンセリング研究, 30, 112-120.
- 川中淳子 1996 登校拒否の家族に関する文献展望 広島大学教育学部紀要, 45, 171-176.
- 小泉智巳・河村茂雄 2013 小学生の学級生活満足度に対する家族関係におけるソーシャル・サポート、ストレスの影響についての一考察 学級経営心理学研究, 2, 8-21.
- 国谷誠朗 1988 親子関係の心理学的健康性と病理性 国谷誠朗(編) 親と子ーその発達と病理(講座 家族心理学3) 金子書房 3-23.
- 牧田清志・小此木啓吾・鈴木寿治 1967 思春期登校拒否の臨床的研究ーとくに慢性重症例についてー 児童精神医学とその近接領域, 8, 377-383.
- 森岡正芳 1980 登校拒否症の家族研究ー母親面接を通してー 臨床心理事例研究, 7, 129-138.
- 中見仁美・桂田恵美子 2007 大学生における Family System Test (FAST) の評価基準の検討ー面接の応答, 精神的健康度の関連からー 家族心理学研究, 21, 20-30.
- 西出隆紀・夏野良司 1995 家族システムの機能状態が子どもの学校適応感に与える影響に関する一研究 家族心理学研究, 9, 23-34.
- 岡堂哲雄 2000 家族支援の要請と心理臨床 家族カウンセリング 金子書房 1-6.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 1993 中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果 教育心理学研究, 41, 302-312.

- 大下由美・亀口憲治 1999 中学2年生の家族イメージの研究—父, 母, 子の3者関係イメージ— 家族心理学研究, **13**, 1-13.
- 酒井 厚・菅原ますみ・真榮城和美・菅原健介・北村俊則 2002 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応 教育心理学研究, **50**, 12-22.
- 佐藤宏平 2001 家族アセスメントの現在 臨床心理学, **1**, 468-475.
- 嶋田洋徳 1993 児童の心理的ストレスとそのコピーング過程—知覚されたソーシャルサポートとストレス反応の関連— ヒューマンサイエンスリサーチ, **2**, 27-44.
- 嶋田洋徳・岡安孝弘・坂野雄二 1993 小学生用ソーシャルサポート尺度短縮版作成の試み ストレス科学研究, **8**, 1-12.
- 新藤克己・相模健人・田中雄二 2002 小学生の「家族イメージ」に関する研究 家族心理学研究, **16**, 67-80.
- 立木茂雄 1994 登校ストレスと家族関係—共分散構造分析による因果モデルの検証— 日本家族心理学会(編) 家族における愛と親密(家族心理学年報 12) 金子書房 50-65.
- 築地典絵 1999 Family System Testを用いた児童の家族関係の研究 カウンセリング研究, **32**, 264-273.
- 築地典絵 2005 家族関係構造の査定法に関する検討 人間環境学研究, **3**, 19-25.
- 山崎道子 1972 学校恐怖症の研究(2) —慢性重症例の社会化の発達を阻害する家族力動に関する研究— 父親像を軸として— 精神衛生研究, **21**, 29-48.
- 渡邊賢二・平石賢二 2007 中学生の母親の養育スキル尺度の作成—学年別による自尊感情との関連— 家族心理学研究, **21**, 106-117.

(2013年10月24日 受稿, 2014年2月2日 受理)

Exploratory Research using Family System Test about primary School Children's Family Cognition Relation with Class Life Satisfaction, School Life Enthusiasm, Social Support and Stressor in the Family Relationships

Tomomi Koizumi (The tenth primary school of the Yamagata city) , Shigeo Kawamura (Waseda University)

This research, using Family System Test (FAST), aimed at examining exploratively how the factors of family system and the human relations in the family affect the satisfaction and enthusiasm of the primary school students in the class, and social support and stressor in the family relationships. FAST can catch the human relations in the family and family system objectively by cohesion and hierarchy. As a result, there was no relationship between the human relations in the family expressed by cohesion and hierarchy, and the satisfaction of the students in the class. However, the relation was accepted between the influence of the student himself/herself or a father in the family, and the enthusiasm for learning or the cognition of the atmosphere of a class. Also, the relation was accepted between the cohesion and the influence in the family, and the expectation of the social support from three sources, that is, a father, a mother and brother. Especially, ① cohesion between the student and the member of a source of support, ② the influence of the student and his/her brothers or sisters, was considered to be an important factor. And, relation was accepted between the lowness of the cohesion between the student and his/her father and the smallness of the influence of the mother in the family, and the cognition of the estrangement in the family and instability in family relationships.

Key word : primary school children, Family System Test, school life enthusiasm, social support